

コーチの社会的勢力の基盤と機能

森 恭¹⁾ 伊藤 豊彦²⁾
豊田 一成³⁾ 遠藤 俊郎⁴⁾

The bases and functions of coaches' social power

Yasushi Mori¹, Toyohiko Ito², Kazushige Toyoda³ and Toshiro Endo⁴

Abstract

The purpose of this study was to make clear the bases and functions of coaches' social power. Three hundred and eighty-nine players, belonging in highschool sport clubs, were administered two questionnaires; one was to measure the bases of the power their coaches had, the other was to measure players' estimation of influences from coaches and their adaptability to sport activities in the clubs.

From the result of factor analysis, six bases of the power were extracted as the factors; expertise-referability, apprehension to punishment, expectation of benefit, enthusiasm of coaches, legitimacy, and affiliation to and acceptance from coaches. Then, the power of coaches were differentiated into six types in terms of the bases.

The functions of each type of power were examined by means of multiple regression analysis. It was found that coaches' personal power which included expert-reference, benefit, enthusiasm and affiliation-acceptance power had mainly contributed to coaches' influence. Especially, benefit and enthusiasm power had been playing crucial roles in coaching.

On the other hand, punishment and legitimate power, so-called position power, were found not to have significant positive effects. It was speculated that influences based on punishment power could not be accepted privately, and would have negative effects on players' adaptation to activities, and that legitimate power was in existence on personal power.

(Japan J. Phys. Educ., 34: 305—316, March, 1990.)

結 言

スポーツ指導において、指導者（以下コーチと呼ぶ）は、被指導者（以下選手と呼ぶ）の行動や態度をコーチ自身が望ましいと考える方向に導き、また、これらを強化することを試みる。では、実際にコーチがどのような指導を行なえばその試みが現実のものとなるであろうか。こ

のことは、コーチにとってたいへん重要な問題である。

本研究においては、スポーツ指導の過程を、行為の主体者（以下Oと略す）としてのコーチが、行為の対象者（以下Pと略す）である選手に対して影響を及ぼす社会的影響過程として捉える。社会的影響過程においては、Oの行為の結果、Pになんらかの変化が生じた場合に、Oが

- 1) 新潟大学
〒950-21 新潟市五十嵐二の町8050
- 2) 島根大学
〒690 松江市西川津町1060
- 3) 滋賀大学
〒520 大津市平津2-5-1
- 4) 山梨大学
〒400 甲府市武田4-4-37

1. Niigata University, Ikarashi-ni-no-cho, Niigata, Niigata (950-21)
2. Shimane University, Nishikawatsu, Matsue, Shimane (690)
3. Shiga University, Hiratsu, Otsu, Shiga (520)
4. Yamanashi University, Takeda, Kofu, Yamanashi (400)

Pに対して影響を及ぼしたとされる。そして、OがPに対して影響を及ぼすことができるような可能性を持つならば、OはPに対して社会的勢力 (social power) あるいは、単に勢力を保持するとされる⁵⁾。

勢力に関しては様々な定義がなされているが^(4),6),11),18),22),24),30)、「OがPに影響を与え得る潜在的な能力の最大値」¹²⁾という定義が最も一般的である。もし、OがPに対して影響を及ぼしたのであれば、それはOがPに対して勢力を保持しているからであると解釈できる。しかし、OがPに対して勢力を保持していても、Oがこれを行使しないか、あるいはPがOの勢力に気づかない場合には、OはPに影響を及ぼすことはできない。このような意味において、勢力は潜在的な影響であると考えられ、逆に、影響は活動状態にある勢力と考えられる。

スポーツ指導の過程をこのような社会的影響過程として捉えたならば、コーチの指導の効果は、コーチの行なう指導の内容や方法などの実質的な影響の試みだけでなく、コーチが選手に対して保持している勢力にも依拠していると考えられる。そこで本研究は、選手に対してコーチの保持している勢力がどのような基盤に基づいているかを明らかにし、それぞれの基盤に基づいた各勢力がどのような機能を果しているかを検討することを目的として行なわれた。このような試みは、コーチが効果的な指導を行ったり、自身の指導を診断するための基礎的な知識、あるいはコーチ教育のための基礎資料を提供するものとする。

ところで、勢力の基盤にはいくつかの質的に異なるタイプが考えられる。たとえば、French and Raven¹²⁾は、対人間の一般的な勢力をその基盤から報酬勢力、強制勢力、正当勢力、参照勢力、専門勢力の5つのタイプに分類している。報酬勢力は、Oは報酬をもたらすことができ、とPが認知することに基づき、強制勢力は、Oは罰を加えることができ、とPが認知することに基づく。正当勢力は、Oが行動を規制することは正当なことである、というPの認識を基

盤としている。参照勢力は、PのOとの同一視に基づき、そして、専門勢力は、Oが高度な知識を持っている、とPが認知することに基づく勢力である。この分類がどのようにしてなされたか明らかにされてはいないものの、多くの研究がこの分類に依拠しており²⁷⁾、この分類を、勢力を考える際の出発点と考えることができよう¹⁷⁾。

また、スポーツ指導の場面と同様に指導一被指導を軸とする、教育場面での教師の勢力に関する研究も行なわれている。たとえば、田崎³⁵⁾は、児童・生徒に対する教師の勢力の基盤を、児童・生徒の認知に基づいて分析し、7つの勢力基盤を因子分析によって因子として抽出している。7つの勢力基盤は、教師との心理的な近さや教師に受容されているという認識 (親近・受容)、教師の外見の良さ (外見性)、教師に従うのは当然であるという内在化された規範 (正当性)、教師の明るさ (明朗性の魅力)、教師からの罰や教師への畏怖 (罰)、教師の指導の巧さや豊富な経験 (熟練性)、そして、教師への児童・生徒の同一化の意図 (同一化) である。

また、浜名ら¹⁴⁾は、教師の持つ勢力の基盤に関する、児童の側の認知と教師の側の認知を比較し、人間的配慮、外面性、罰が児童に認知されている勢力の基盤であるとしている。浜名らは、人間的配慮を田崎³⁵⁾の同一化と同様のものとし、さらに親近・受容および明朗性の魅力も包摂するものと捉え、外面性および罰は田崎の研究における勢力の基盤のそれぞれと対応している。

このように田崎および浜名らの研究が教師一般の勢力を取り上げたのに対して、平川¹⁵⁾は、対象を体育教師に限定して、勢力の基盤を分析した。この研究では、学校期別に因子分析が行なわれ、体育教師の勢力の基盤が検討されている。各段階を通じて勢力の基盤とされたものは、人間性、熟練性、外見性、罰・威圧性である。この他に、小学校期では、同一化が外見性と1つの因子をなし、さらに正当性が見出された。中学校期では、専門性と明朗性が見出されている。

そして高校期においては、正当性、専門性、一体性が見出されている。これらの勢力基盤は、田崎および浜名らの研究における勢力基盤にほぼ対応することから、体育教師の特異性は見られなかったといえる。これに対して、学校期の間の比較から、中学校、高校と進むにつれて教師としての技量が重要な勢力の基盤として認識される傾向が強くなり、逆に受容性の重要度が小さくなっていくことを指摘している。

これらの研究で見出された、教育場面における教師の勢力と基盤と、French and Raven¹²⁾における一般的な勢力の基盤との比較から、教師と生徒の間に特有な勢力の基盤として、心理的な近さ(親近性)、受け入れてもらえるという認知(受容性)、外見の良さやかっこよさ(外見性)、明るさ(明朗性)が挙げられている。これらの基盤とは対照的に、French and Ravenが提唱した報酬勢力は、教師の勢力を分析した研究では一貫して見出されていない。この点については特に触れられていないが、教育場面の特徴となんらかの関わりがあると考えられる。

以上のように、Pに対するOの勢力は、その基盤によっていくつかのタイプに分類され、また、OとPが置かれている状況や場面によって、基盤が異なることが予想される。従って、本研究では、まず、スポーツ指導場面におけるコーチの勢力の基盤を他の場面における研究と比較し、検討する。

一方、勢力の機能に関しては、一般的な対人関係場面におけるほとんどの研究が、前述したFrench and Raven¹²⁾の分類に基づいて行なわれ、概して、専門勢力および参照効力に基づく影響が有効であるとされている^{27),31),33),39)}。

また、教師の勢力の機能については、田崎³⁶⁾は、小学校教師のリーダーシップ行動類型と勢力基盤との関係を見童の認知に基づいて分析し、正当性に基づいた勢力が、教師の勢力の中で、最も効果の大きい勢力であることを指摘している。リーダーシップ行動類型と勢力の基盤との関係については、PM型リーダーに対して正当性、親近性、熟練性、参照性などの得点が

高く、P型リーダーに対して罰が高く、他の基盤の得点が低かった。この結果から、教師のPM型リーダーシップは、正当性、親近性、熟練性、参照性の勢力基盤によって支えられ、P型リーダーシップは、罰に基づいていると考えられた。尚ここでは、M型およびpm型は、勢力基盤と明確な関連を持たなかった。

田崎³⁷⁾は、教師の勢力基盤と児童のスクール・モラル(学習動機、チーム・ワーク、目標達成努力など)との関連を研究している。この結果、教師の指示に従う理由として、正当性と親近・受容の基盤に高い得点を付与している児童のスクール・モラルが高く、反対に、教師の勢力の背景に罰を認知する児童のスクール・モラルは低いものであった。さらに、田崎³⁶⁾と同様に、正当性に基づいた勢力が、最も効果の大きい勢力であることが示唆されている。他の場面における研究においては、正当性を基盤にした勢力は効果が小さいことが指摘されており^{27),31),33)}、ここでの結果は教師の勢力の場合に限定されると考えられている^{14),36),37)}。

このように、勢力の基盤のみならず、勢力の効果に関しても、OとPの関与している場面によって異なった特質が存在することが予想される。このため、本研究では、スポーツ指導の場面において、コーチの勢力のそれぞれのタイプが、どのような機能を果しているかについても検討を加える。そこで、まず、コーチからの影響に関する選手の評定(以下被影響感と呼ぶ)およびコーチに対する総体的な評価としての満足度を取り上げ、勢力基盤に対する認知との関連を検討する。さらに、Oの勢力がPの適応をも規定するという指摘^{3),25),37)}に従い、選手の日常のスポーツ活動への適応の指標として、所属運動部への関心、練習への意欲、チームメイトとの関係の3つの指標を取り上げ、これらに対する各タイプの勢力の効果についても分析を試みる。

方 法

調査期間：昭和62年12月から昭和63年1月。

表1. 勢力基盤質問紙の項目と因子分析の結果 (N=389)

項目(番号・内容)	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	共通性
17 技術的に尊敬しているから	825	-031	166	152	085	050	-117	755
18 監督はよいお手本だから	795	-039	215	190	176	165	-090	783
10 監督がよい成績や記録を持っているから	760	105	045	071	072	070	071	610
33 自分より経験が豊富だから	725	114	217	187	042	-057	011	626
8 監督がこの競技をよく知っているから	722	073	227	170	-033	-063	-082	619
6 監督のようになりたいから	714	-029	144	109	092	349	-097	682
29 有名な監督だから	706	227	063	110	163	137	053	615
13 監督が良い選手を育てたことがあるから	701	196	116	106	153	191	082	620
5 自分より技術が上手だから	686	081	222	070	145	-056	-079	561
28 監督の技術を盗みたいから	663	-040	232	169	146	199	-048	587
11 監督を信頼しているから	573	-172	377	305	-041	294	-230	734
25 人間的に尊敬しているから	560	-082	265	344	116	401	-119	698
31 いろいろな技術を教えてもらえるから	552	-027	527	295	-115	-070	-147	709
7 監督に叱られるから	100	784	066	036	104	019	-293	727
20 監督がこわいから	238	783	042	-077	010	098	-051	689
26 反抗する勇気がないから	072	720	-044	007	051	-110	017	541
3 罰がこわいから	-118	716	-072	-082	-137	072	-287	645
35 後々やかましいから	-113	606	012	-213	136	-003	452	648
23 しかたがないから	-168	561	-156	-098	136	-136	438	606
30 他の人がそうするから	-048	561	-111	038	231	-036	307	479
21 指示に従う方がうまくいくから	196	045	620	042	151	036	037	452
39 自分の悪い所を直してもらえるから	349	-129	588	269	019	009	-219	604
1 自分のためになるから	229	-201	578	019	-023	109	-210	484
12 自分は選手だから	069	070	536	031	-025	296	318	487
42 意欲的に指導してもらえるから	314	-058	553	529	102	087	-008	706
37 一緒に練習してくれるから	265	-001	136	701	137	120	-066	617
38 まじめな人だから	352	-031	126	687	148	071	-018	640
40 熱意を持って接してくれるから	341	-184	496	541	-012	140	-121	724
36 部員のことを本当に考えてくれるから	290	-125	439	510	009	210	-162	623
16 監督の指示だから	130	224	238	125	721	055	042	663
27 監督に従うのはあたりまえだから	257	151	364	067	676	124	-241	756
41 監督は指導者だから	163	205	325	242	673	-090	164	721
9 監督の言うことは守らねばならないから	193	196	361	123	614	116	-313	710
4 監督の言うことを聞くのは当然だから	201	033	405	090	556	164	-387	700
32 目上の人だから	187	326	111	325	508	035	134	536
2 監督が好きだから	406	-027	031	196	089	640	-169	652
34 自分が信頼されているから	178	007	311	102	031	595	028	494
19 監督がおもしろい人だから	340	135	-003	347	101	542	002	558
22 自分の事をよく知っているひとだから	396	056	428	206	-050	501	-058	644
14 監督がやさしい人だから	360	020	-087	435	311	483	043	658
15 むりやり従わせるから	-094	448	-140	-372	010	013	492	609
24 監督の言うことが正しいと思うから	463	-118	492	259	197	118	-241	648
寄与率	195	096	099	077	069	057	041	634
累積寄与率	195	291	390	467	536	593	634	(634)
回転前の固有値	14.12	4.78	2.38	1.59	1.41	1.22	1.12	26.62

回転前の固有値を除いて、小数点省略。

.500以上の因子負荷を太ゴシック表記。

調査対象：高校運動部に所属する高校1, 2年生389名(男子126名, 女子263名)。

調査方法：各運動部の顧問教員に調査に関して承諾を得た後, 各運動部あてに, 以下に述べる2種類の調査からなる冊子を郵送した。この冊子は, 顧問教員によって配付および回収された後, 各運動部ごとに一括して返送された。尚, 調査においては, 対象が高校運動部員であることを考慮して, 監督やコーチなどの厳密な区別を行わずに, 実際に指導にあたっている指導者について回答するように求め, このような人を便宜上, 「監督」と統一して表記した。

コーチの勢力基盤の測定：伊藤・森²⁰⁾が作成した質問紙(60項目)の内容を再検討し, 新たに42項目の質問紙として再構成した(表1)。回答方法は, 各質問文が「現在の監督の指示に従う理由」としてあてはまる程度を「全くあてはまらない」(1点)から「よくあてはまる」(6点)までの6段階で評定するというものであった。

伊藤・森²⁰⁾は, 因子分析による因子として, 4つの勢力基盤を抽出したが, このうち, 指導性の因子は概念的に異なるいくつかの下位因子を含んでいると考えられる。また, 技術指導の因子は, コーチの技術指導能力の認知を暗黙には想定しているものの, この因子に負荷の高い項目のほとんどは, 選手の動機づけを測定していると考えられ, この他にもコーチの勢力を測定するには, ふさわしくないと考えられる項目もいくつか含まれていた。このため, 本研究では, 伊藤・森²⁰⁾の質問紙より36項目を用語を検討した上で採用した。さらに, 教師の勢力に関する研究^{14), 15), 35)}を参考に, 6項目を新たに加え, 合計42項目の質問紙を構成した。

コーチからの影響に関する測定：以下の5つの尺度について, 各質問文が「日頃感じていることにあてはまる程度」を, 「全くあてはまらない」(1点)から「よくあてはまる」(6点)までの6段階で評定させた。

① 被影響感：コーチからの影響に関する評定。「私の技術や戦術がいまあるのは, 監督の指

導のおかげである」など3項目。

② 満足度：コーチに対する総体的な評価。「私は監督の指導を信頼している」など4項目。

③ 所属運動部への関心。「毎日, 練習に行くのがなんとなく楽しい」など3項目。

④ 練習への意欲。「もっと練習して上手になりたいと努力している」など3項目。

⑤ チームメイトとの関係。「私が困っているときには, クラブの仲間が助けてくれる」など3項目。

結 果

コーチの勢力の基盤

コーチの勢力の基盤を明らかにするため, コーチの勢力基盤質問紙への回答を主成分分析し, 固有値1.00以上の7因子に関して, ノーマル・バリマックス回転を施したところ, 第6因子までが解釈可能であった(表1)。

第1因子は, 「技術的に尊敬しているから」「監督がこの競技のことをよく知っているから」「監督はよいお手本だから」「監督のようになりたいから」など, 選手がコーチは専門的な知識や高度な技能を持っていると認識することと, コーチに対して同一化の意図を持つことであり, この因子を専門・参照性と解釈した。第2因子は, 「監督に叱られるから」「監督がこわいから」など, 指示に従わない場合にコーチから罰を受けることへの予想やコーチへの畏怖であり, この因子を罰の脅威と解釈した。第3因子は, 「指示に従う方がうまくいくから」「自分のためになるから」など, 指示に従うことが自身の利益につながることへの期待であり, この因子を利益への期待と解釈した。第4因子は, 「熱意をもって接してくれるから」「部員のことを本当に考えてくれるから」など, コーチの熱意や, 指導における積極的な態度の認知であり, この因子を指導意欲と解釈した。第5因子は, 「監督の指示だから」「監督に従うのはあたりまえだから」など, コーチにしたがうのは当然であるという内在化された規範であり, この因子を正当性と解釈した。第6因子は, 「監督が好きだから」「自分が

信頼されているから」など、コーチとの心理的な近さと、自分を受け入れてもらえるという印象であり、この因子を親近・受容性と解釈した。

コーチの勢力は、以上の勢力基盤に基づいて、専門・参照勢力、罰勢力、利益勢力、指導意欲勢力、正当勢力、親近・受容勢力の6タイプの勢力から構成されていると考えられる。そこで、各因子のうちいずれか一つのみで.500以上の負荷を示した項目の得点を各因子毎に合計し、これをそれぞれの基盤に基づいた勢力の得点とした。

次に、各勢力間の関係を明らかにするために、各勢力得点間の相関行列(表2)をもとに、固有値1.00を基準に主成分分析およびノーマル・バリマックス回転を施したところ、2つの因子

が得られた。各勢力得点の2つの因子への因子負荷量をプロットしたものが図1である。

図1より、専門・参照、利益、指導意欲および親近・受容勢力は、第1因子への負荷が高く、第2因子への負荷は低い。これらは、コーチの属性あるいはコーチと選手との個人的な関係を基盤とした個人勢力³³⁾であると考えられ、相互に関連しあっていると考えられる。これに対して、罰勢力は、第1因子への負荷は低く、第2因子への負荷が高いことから、先の4勢力とは異なった特質を持つ勢力であることがうかがえる。正当勢力に関しては、他のすべての勢力と有意な正の相関を示し、どちらの特質をも持つことが予想される。また、罰および正当勢力は、コーチと選手という社会的な位置関係を背景と

表2. 各勢力間の相関係数 (N=389)

	専門・参照	罰	利益	指導意欲	正当
罰	0.20				
利益	0.528***	-0.090			
指導意欲	0.645***	-0.187***	0.541***		
正当	0.495***	0.253***	0.450***	0.462***	
親近・受容	0.664***	-0.012	0.470***	0.597***	0.411***

小数点省略。*** $p < .001$.

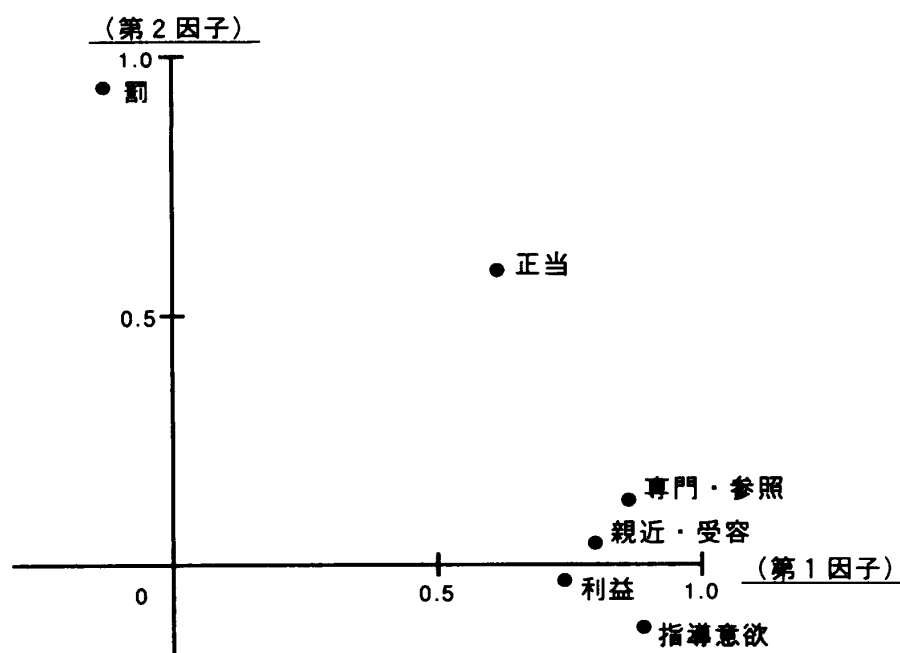


図1. 各勢力得点の第1および第2因子への負荷量 (N=389)

表 3. 重回帰分析の結果 (N=389)

		影響尺度得点 (目的変量)				
		被影響感	満足度	部への関心	練習意欲	チームメイトとの関係
勢力得点	専門・参照	699***	736***	202***	386***	210***
		365***	450***	-108*	094	-064
	罰	-121*	-272***	-239***	-324***	-088
		-095	-328***	-169***	-281***	-010
	利益	562***	563***	365***	483***	293***
		220***	170***	219***	278***	126*
説明変量	指導意欲	643***	720***	362***	469***	381***
		229***	318***	162**	149**	262***
	正当	401***	361***	145**	217***	199***
		002	-049	-003	013	022
	親近・受容	551***	641***	273***	328***	195***
		045	205***	093	-007	-040
	重相関係数	758***	841***	450***	592***	388***
	重決定係数	575	708	203	351	151

小数点省略。

重相関係数および重決定係数は自由度調整済みの値である。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

した位置勢力³³⁾であると考えられる。

コーチの勢力の機能

まず、コーチからの影響に関する質問紙の信頼性を検討するために、被影響感、満足感、所属運動部への関心、練習意欲、およびチームメイトとの関係の5つの尺度の内的整合性係数²³⁾を算出した。係数は0.8686から0.9513と十分に高いものであり、各尺度は内的に一貫したものであると考えられるため、各尺度内の項目得点を合計し、それぞれの影響尺度得点とした。

次に、各影響尺度へのコーチの勢力の効果を検討するために、6つの勢力を説明変量とし、各影響尺度のそれぞれを目的変量とした、一括多量型投入法による重回帰分析を行なった(表3)。

各影響尺度に対する重相関係数は、全て0.1%水準で有意であり、特に被影響感と満足度における重相関および重決定係数は高いものであった。各勢力の偏相関係数は、専門・参照、利益、

指導意欲、および親近・受容勢力において正で有意な値であった。特に満足度に対してはこれらの4勢力得点の偏相関係数がすべて0.1%水準で有意であり、被影響感に対しては、専門・参照、利益、および指導意欲勢力が有意であった。また、選手の適応に関する部への関心、練習意欲、チームメイトとの関係の2つの尺度に対しては、罰勢力以外の5勢力すべてが有意で正の相関係数を示したものの、偏相関係数は利益および指導意欲勢力のみで有意であった。一方、罰勢力はすべての影響尺度との間に負の相関係数および偏相関係数を示した。この中には、有意水準に達しているものも達していないものもあったが、すべてが負の値であったことは重要である。これに対して、正当勢力は、すべての影響尺度との間に有意な正の相関係数を示しながら、偏相関係数はすべて有意水準に達しなかった。

考 察

コーチの勢力の基盤

本研究では、まず、指導におけるコーチの専門性と参照性、罰の脅威、コーチの指導が自身の利益につながることへの期待、コーチの指導意欲、コーチから指導を受けることの正当性、およびコーチとの親近性やコーチの受容性がコーチの勢力の基盤となっていることが見出された。

コーチの勢力基盤のうち、専門性、参照性、罰の脅威、正当性は、French and Raven¹²⁾が提唱した専門勢力、参照勢力、強制勢力、および正当勢力のそれぞれの基盤と対応するものである。また、これらは、教育場面においても、同様に勢力の基盤とされている^{14),15),35),37)}。従って、これらの勢力基盤は、一般的な場面および教育場面と同様に、スポーツ指導場面においても、コーチの潜在的な影響力の基礎となるものであると言える。ただし、コーチの専門性と参照性が因子として1つにまとまったことは、コーチの持つ専門的な知識や技能は、選手が身につけるべきものであり、専門的な知識や高度な技能を持ったコーチは、選手にとってはモデルとなり、同一化の対象となるというスポーツ指導の場面の特質を反映しているものと考えられる。

また、教師の勢力に関する研究は、上に挙げた4つの勢力基盤以外に、親近性、受容性、外見性、明朗性などを、教師に特有な勢力の基盤として見出している。本研究の結果は、これらのうち外見性と明朗性を見出すことができなかったものの、親近性と受容性を因子として抽出しており、これらについては、教育やスポーツ指導などの指導-被指導を軸にした場面で見られる勢力基盤ではないかと考えられる。

この親近・受容性とは逆に、利益への期待は、教育場面での勢力研究では見出されていない。しかし「うまくなる」あるいは「直してもらえ」など、指導に従うことが「自分のためになる」という利益への期待は、OがPに対して報

酬をもたらすことができるとPが認知するという、French and Ravenの報酬勢力の基盤と類似した側面を持つものである。ただしFrench and Ravenの報酬勢力においては、報酬とは単に、Oに従うことで与えられる報酬であり、Pの内発的動機づけを低下させる可能性を持った、統制的な外的報酬^{7),8)}であると考えられる。このような、報酬の道具性ゆえに、Student³³⁾は、強制勢力および正当勢力とともに、報酬勢力を位置勢力のカテゴリーに包括している。しかし、このような報酬が教育場面で用いられることは少ないと思われ、このために、報酬勢力が教師の勢力として見出されていないのではないかと考えられる。

これに対して、本研究における利益とは、スポーツ活動における対処能力の向上や課題の達成という内的な報酬、あるいは、内発的動機づけを強化するような報酬であると考えられる。このような意味での報酬は、Oの位置によってもたらされるものではないため、コーチの利益勢力は、個人勢力のカテゴリーに含まれるべきであると考えられる。このことは、利益勢力が、他の個人勢力との間に高い相関を示したことからもうかがえる。また、達成関連場面において、課題達成への期待が、その人の達成への動機づけや達成行動に影響を及ぼすことは多くの研究で論じられ、また、実証されており^{1),9),38)}、選手の動機づけを高めるために重要な勢力であると考えられる。

指導意欲に関しては、これと類似した勢力基盤は、従来の研究においてはほとんど見られない。しかし、体育教師の勢力を検討した平川¹⁶⁾は、本研究と同様に高校生を対象とした場合に、体育教師の人間性と熟練性の下位因子として熟意性を抽出している。体育指導とスポーツ指導は、内容、方法の点からかなりの共通性があり、指導意欲はスポーツ指導を行なうコーチの勢力の基盤としても妥当なものであると考えられる。

また、原因帰属理論を対人関係場面に拡張したWeiner³⁸⁾は、他者の行動の原因を推論する

際に、統御可能性次元がその他者への感情反応を規定し、その他者への行動に変化をもたらされることを示唆し、統御可能な内的要因として努力を挙げている。本研究においても、コーチの指導意欲に関する認知が、負の感情を喚起することによって機能する罰の認知と有意な負の相関を示したことを考慮すれば、選手がコーチの指導意欲を認知するほど、コーチに対する選手の正の感情が増大すると考えられよう。

さらに、教師の熱心さの重要性を多くの研究が論じている^{2),28),29)}ことを考えあわせれば、スポーツ指導におけるコーチの熱意や積極的な態度を選手が認知することは、コーチの勢力の基盤として重要であると考えられる。

コーチの勢力の機能

コーチの勢力は、6つの勢力基盤に基づいて、専門・参照勢力、罰勢力、利益勢力、指導意欲勢力、正当勢力、親近・受容勢力に分類された。

重回帰分析の結果においては、コーチの個人勢力と考えられる専門・参照、利益、指導意欲、および親近・受容勢力が、影響尺度との間に有意な正の偏相関を示した。この結果は、コーチがその地位ではなく、自身の望ましい属性や選手との積極的で暖かい関係に基づいて指導にあたっていると選手が認知することで、選手に対するコーチからの影響やコーチに対する満足がもたらされることが多くなり、さらに、選手のスポーツ活動への適応に対しても良い効果が生み出されることを示している。

この中でも、利益勢力と指導意欲勢力は、すべての影響尺度との間に有意な正の相関および偏相関を示している。このことは、コーチの指導に従うことが自身の利益につながるという認知に基づく利益勢力と、コーチの指導における熱意に基づく指導意欲勢力が、コーチの個人勢力の中でも、中心的な機能を果たすことを意味している。

加えて、これらの勢力の基盤は、従来の研究^{12),13),14),15),34),35)}では、ほとんど見られないにもかかわらず、本研究においては、因子分析によって因子として抽出された。このことから、こ

れらの勢力が、スポーツ指導場面において、コーチに特に必要とされると考えられる。言い換えるならば、コーチの指導が有意義なものであり、コーチが熱心に指導にあたっていると選手に認知されることで、指導が効果的なものになると予想される。

また、行動の結果に対する期待が行動や動機づけに変化をもたらすことは、様々な場面で示されており^{1),9),38)}、利益勢力は、「自分のためになる」ことに対して選手に正の期待をもたらすことで、選手の動機づけを高めると予想される。一方、指導意欲勢力は、コーチに対する選手の感情と関連し、選手のスポーツ活動への適応に対しても効果を示したことから、コーチに対する感情が活動の場全体へと汎化されることが予想される。従って、利益勢力と指導意欲勢力は、スポーツ活動における選手の期待と感情が、認知と行動を媒介するという観点¹⁹⁾からも重要であると考えられる。

専門・参照勢力は、被影響感および満足度に対しては有意で高い正の偏相関を示し、この結果は、多くの一般的な状況での勢力の機能に関する研究と一致する^{27),31),33),39)}。しかし、この勢力は、所属運動部への関心に対しては、有意な負の偏相関を示した。コーチの専門的な知識は、コーチが選手に利益をもたらすための必要条件であると考えられよう。このため、コーチが専門的で高度な知識や技能を持っていると認知されることによって、コーチが選手に影響を与える可能性は高くなり、選手のコーチに対する評価もポジティブなものとなるであろう。しかし、その知識や技能が選手に利益をもたらすような形で、コーチの積極的な態度とともに提供されるのでなければ、選手の適応を阻害する可能性をも秘めていると考えられる。これはおそらく、高度な専門的知識や技能を持ったコーチは、指導にあたっている選手に対しても、より高度なものを要求することで、選手に過度の緊張を与えるためではないかと思われる。このことに関しては、リーダーシップ行動のPM理論²⁶⁾において、リーダーの目標達成機能における圧力因

子が、集団のメンバーに過度の緊張を与えたとされていることと共通する。従って、コーチの勢力の機能の観点からも、単に競技に対する専門的な知識や技能を持つだけでなく、指導にあたっている選手にふさわしい目標設定、練習内容・方法、スケジュールなどを提供できる資質がコーチには要求されると言えよう。

親近・受容勢力は、満足度以外の影響尺度に対しては有意な偏相関を示さなかった。従って、この勢力は、コーチの評価をポジティブなものとするが、コーチの影響の試みを促進するような、主要なものではないと考えられる。しかし、この勢力の基盤は、教師の勢力に関する研究では必ず見出されており、スポーツ指導の場面でも、なんらかの機能を果していることが予想される。たとえば、リーダーシップ行動のPM理論²⁶⁾においては、リーダーの目標達成への圧力から生じる緊張を、リーダーのメンバーへの配慮が解消するために、PM型のリーダーシップ行動が有効であることが示されている。このことを考慮すれば、親近・受容勢力は必ずしも主要な勢力ではないものの、利益勢力、指導意欲勢力、専門・参照勢力を補うのではないかと考えられる。

罰勢力については、効果が小さいことは多くの研究で示されており、本研究においてもすべての影響尺度に対して負の相関および偏相関を示した。この結果は、教師の勢力について検討した田崎²⁷⁾と同様に、コーチの影響の背景に罰が認知される場合には、コーチから選手への影響力は弱くなり、選手の適応の度合いも低くなることを意味する。しかし、このことは、指導において、罰を全く用いないことを支持するものではない。指導—被指導を軸とした場面において、望ましくない行動に対して罰による負の強化を与えることは必要なことであると考えられる。

また、罰の効果に関しては、コーチからの影響がどの程度内面化されるかを考慮する必要があると思われる。Festinger¹⁰⁾およびKelman²¹⁾は、社会的影響を影響がPに内面化される程度

によって、表面的な追従とより内面化された影響とを区別し、さらに、影響の内面化の程度は、影響の背景となっているものによって異なると述べている。両研究をまとめれば、追従は報酬や罰などを手段とした統制によって起こり、影響がより内面化されるためには、Oの魅力やOからの影響の信憑性などが必要とされる。

この指摘を考慮するならば、本研究における被影響感の尺度は、質問紙への回答によって得られており、単なる追従の段階ではなく、私的に受容されている影響を測定するものであると考えられる。従って、コーチの罰勢力がこの尺度に対して、ほとんど無相関であったことは、両者の結果と一致するものであると考えられる。もし、コーチが、自身の監視のもとで、望ましくない行動をさせないようにすることのみを意図するのであれば、罰勢力に依拠した影響を用いることで十分であり、罰の即効性と簡便さ³²⁾はコーチにとって有用なものであると言えよう。

しかし、罰の効果は、罰が不快な感情を喚起することに依拠しており、実際、罰勢力は、満足度と適応の尺度に対して負の偏相関を示している。若年層を対象としたスポーツ指導においては特に、選手がスポーツ活動を楽しみ、自発的、積極的にスポーツ活動に取り組むように、さらに、スポーツ活動に価値を見出すように導くことも、コーチの果すべき重要な役割であろう。このような観点からも、指導の中で、罰はあくまでも補助的に、最小限用いられるべきものであり、コーチが罰を用いる際には、細心の注意が必要であることが、コーチの勢力に関する本研究からも指摘されよう。

最後に、正当勢力については、従来、文化的価値、社会的構造の受容、既に正当であると認められたものからの任命、正当な手続きなどを基礎にしているとされており¹²⁾、Oの社会的な位置に根ざした勢力であるとされてきた³³⁾。これに対して、今井¹⁶⁾は、正当勢力は専門勢力と参照勢力を基礎とした個人勢力であると主張している。本研究において、正当勢力はコーチの個

人勢力と考えられる利益、指導意欲、専門・参照、親近・受容の各勢力との間にも、位置勢力のカテゴリーに含まれる罷勢力との間にも、有意な正の相関を示した。従って、コーチの正当勢力は変化・社会的な背景よりも個人勢力を背景として成立しているながらも、位置勢力としての側面を持っているのではないかと考えられる。

また、教師の勢力に関する研究^{14),36),37)}では、正当勢力がもっとも大きな機能を果していたが、本研究ではこのような結果は示されず、正当勢力の影響尺度への偏相関はすべて有意ではなかった。このことは、コーチの正当勢力が、必ずしも重要なものではなく、単独では機能しないものであることを意味する。従って、指導—被指導を軸とした類似した過程でありながらも、教師と生徒という公的な関係における過程と、コーチと選手という総体的に私的な関係における過程においては、正当勢力の機能は異なったものとなると考えられる。このことから、学校の運動部の顧問である教師が、選手としての生徒を指導する際には、特に、教師と生徒の社会的な位置関係に依拠することのないように、選手である生徒との相互作用の方法に留意する必要があることが示唆されよう。

ま と め

本研究は、スポーツ指導を社会的影響過程の観点から捉えた上で、コーチの勢力の基盤とその機能を明らかにすることを目的として行なわれた。対象は高校運動部員であった。

コーチの勢力について：コーチの勢力の基盤に関する調査から、専門・参照性、罰の脅威、利益への期待、指導意欲、正当性、および親近・受容性の6つの勢力基盤が見出された。各基盤に基づいて、コーチの勢力は6タイプに分類され、それぞれ専門・参照勢力、罰勢力、利益勢力、指導意欲勢力、正当勢力、および親近・受容勢力と解釈された。

コーチの勢力の機能について：コーチの勢力はさらに、個人勢力と位置勢力に分類され、選

手に対するコーチの影響は個人勢力に大きく規定された。なかでも、利益勢力と指導意欲勢力が、選手のコーチからの被影響感やコーチへの満足度のみならず、活動における適応感を大きく規定する重要な要因であると考えられた。専門・参照勢力は、コーチからの被影響感を強め、コーチの評価をポジティブなものとするが、行使のしかたによっては、選手の適応を阻害する可能性も秘めていると考えられた。親近・受容勢力は、単独ではコーチの評価をポジティブなものとするのみであるが、他の勢力を補うことが予想された。罰勢力の行使による影響は、選手に内面化されることが少なく、選手の適応に対して負の効果をもつと考えられる。正当勢力は、他の勢力の影響を除去した場合には、5つの影響尺度得点に対して効果を持たず、コーチの個人勢力を基礎に成立しているながら、罰勢力と同様の機能を果している勢力であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) Atkinson, J.W. and Feather, N.T. (Eds.), A theory of achievement motivation, Wiley: New York, 1966. Pp. 392.
- 2) Brophy, J.E. and Good, T.L., Teacher-student relationships: Cause and consequences, Holt, Rinehart, and Winston: New York, 1974. pp. 251—54.
- 3) Cartwright, D., "Power: A neglected variable in social psychology," in Cartwright, D. (Ed.), Studies in social power, University of Michigan Press: Ann Arbor, Michigan, 1959. pp. 1—14.
- 4) Cartwright, D., "A field theory conception of power," in Cartwright, D. (Ed.), Studies in social power, University of Michigan Press: Ann Arbor, Michigan, 1959. pp. 183—220.
- 5) Cartwright, D., "Influence, leadership, control," in March, J.G. (Ed.), Handbook of organizations, Rand McNally College Publishing: Chicago, 1965. pp. 1—47.
- 6) Dahl, R.A., "The concept of power," Behavioral Science, 2: 201—15, 1957.
- 7) デシ(安藤延男・石田梅男 訳), 内発的動機づけ, 誠信書房, 1980. Pp. 374. (Deci, E.L., Intrinsic-motivation, Plenum Press: New York, 1975.)
- 8) デシ(石田梅男 訳), 自己決定の心理学, 誠信書房, 1985. Pp. 316. (Deci, E.L., The psychology of self determination, Lexington Books: New York,

- 1980.)
- 9) Feather, N.T., *Expectancy and action: Expectancy-value models in psychology*, Lawrence Erlbaum Associates: Hillsdale, New Jersey, 1982. Pp. 436.
 - 10) Festinger, L., "An analysis of compliant behavior," in Sherif, M. and Wilson, M.O. (Eds.), *Group relations at the crossroads*, Harper: New York, 1953. pp. 232-56.
 - 11) French, J.R.P. Jr., "A formal theory of social power," *Psychological Review*, 63: 181-94, 1956.
 - 12) French, J.R.P. Jr. and Raven, B., "The basis of social power," in Cartwright, D. (Ed.), *Studies in social power*, University of Michigan Press: Ann Arbor, Michigan, 1959. pp. 150-67.
 - 13) Gold, M., "Power in the classroom," *Sociometry*, 21: 51-60, 1958.
 - 14) 浜名外喜男・天根哲治・木山博文「教師の勢力資源とその影響に関する教師と児童の認知」*教育心理学研究*, 31: 220-28, 1983.
 - 15) 平川澄子「体育教師の勢力資源に関する研究—学習者の発達段階別にみた比較を中心に—」*お茶の水女子大学人文科学紀要*, 41: 129-42, 1987.
 - 16) 今井芳昭「社会的勢力：その基盤の相互関係と今後の研究課題」*社会心理学評論*, 1: 49-56, 1981.
 - 17) 今井芳昭「親子関係における社会的勢力の基盤」*社会心理学研究*, 1: 35-41, 1986.
 - 18) 今井芳昭「影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響者の認知・影響者に対する満足度との関係」*実験社会心理学研究*, 26: 163-73, 1987
 - 19) 伊藤豊彦「帰属教示が運動パフォーマンスに及ぼす影響について」*体育学研究*, 28: 299-308, 1984.
 - 20) 伊藤豊彦・森 恭「コーチの勢力資源に関する選手の認知—高校バレーボール部員について—」*島根大学教育学部紀要（教育科学）*, 21: 25-30, 1987.
 - 21) Kelman, H.C., "Compliance, identification, and internalization three process of attitude change," *Journal of Conflict Resolution*, 2: 51-60, 1958.
 - 22) Kiesler, C.A. and Kiesler, S.B., *Conformity*, Addison-Wesley: Reading, Massachusetts, 1969. p. 69.
 - 23) Kuder, G.F. and Richardson, M.W., "The theory of the estimation of test reliability," *Psychometrika*, 2: 151-60, 1937.
 - 24) Lewin, K., "Appendix. Analysis of the concepts whole, differentiation, and Unity," in Cartwright, D. (Ed.), *Field theory in social science: Selected theoretical papers*, Tavistok: London, 1952. pp. 335-38.
 - 25) Lewin, K., Lippit, R. and White, R.K., "Patterns of aggressive behavior in experimentally created 'social climates'," *Journal of Social Psychology*, 10: 271-99, 1939.
 - 26) 三隅二不二, *リーダーシップ行動の科学*, 有斐閣, 1978. Pp. 500.
 - 27) Podsakoff, P.M. and Schreisheim, C.A., "Field studies of French and Raven's bases of power: Critique, reanalysis, and suggestion for future research," *Psychological Bulletin*, 97: 387-411, 1985.
 - 28) Rosenshine, B., "Enthusiastic teaching: A research review," *School Review*, 78: 499-514, 1970.
 - 29) Rosenshine, B. and Furst, N., "Research on teacher performance criteria," in Smith, B. (Ed.), *Research in teacher education: A symposium*, Prentice-Hall: Englewood Cliffs, New Jersey, 1971. pp. 37-72.
 - 30) Shaw, M.E., *Group dynamics: The psychology of small group behavior*, 3rd ed., McGraw-Hill: New York, 1981. pp. 213-304.
 - 31) Shetty, Y.K., "Managerial power and organization effectiveness: A contingency analysis," *Journal of Management Studies*, 15: 176-86, 1978.
 - 32) Stogdill, R.M., *Handbook of leadership: A survey of theory and research*, Free Press: New York, 1974, p. 293.
 - 33) Student, K.R., "Supervisory influence and work-group performance," *Journal of Applied Psychology*, 52: 188-94, 1968.
 - 34) 田崎敏昭「学級集団における勢力の源泉」*佐賀大学教育学部研究論文集*, 24: 105-18, 1976.
 - 35) 田崎敏昭「児童・生徒による教師の勢力源泉の認知」*実験社会心理学研究*, 18: 129-38, 1979.
 - 36) 田崎敏昭「教師のリーダーシップ行動類型と勢力の源泉」*実験社会心理学研究*, 20: 137-45, 1981.
 - 37) 田崎敏昭「教師の勢力資源とモラル」*佐賀大学教育学部研究論文集*, 31: 147-63, 1984.
 - 38) Weiner, B., "An attributional theory of achievement motivation and emotion," *Psychological Review*, 92: 548-73, 1985.
 - 39) Zander, A. and Curtis, T., "Effects of social power on aspiration setting and striving," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64: 63-74, 1962.

(平成元年10月19日受付)